

宇都宮大地域デザイン科学部

まちづくりを学ぶ場

経済、心理、観光、里山、食文化……。これらすべてをまちづくりに関わる専門科目として学び、県内の公的機関やNPOなどで実践する新学部「地域デザイン科学部」が、宇都宮大学にできて丸4年がたち、今年3月に初の卒業生が巣立った。開設3年目に入学した記者が新しい学びの現場取材した。

【宇都宮大学地域デザイン科学部3年・篠原 紘】

新設4年 多彩な人材育成

学生時代に第2外国語や憲法、数学などを一般教養として、専門とは別の勉強をした経験のある人は多いだろう。しかし、宇都宮大学に2016年度に誕生した地域デザイン科学部は、文系のコミュニケーションデザイン学科、理系の建築都市デザイン学科、社会基盤デザイン学科の3学科からなり、文理相互に学ぶ。特にコミュニケーションデザイン学科では、経済学から福祉、観光な

ど多岐にわたる14の分野をすべて専門科目とする。この14の分野に共通するのはまちづくりをする上で欠かせない要素であることである。

この春、同学科を卒業した1期生51人が日本各地で社会人としてスタートを切った。3割にあたる17人が、栃木県庁や県内外の市役所などの公務員として就職。民間企業へも情報通信業や金融業へ、幅広く踏み出した。

卒業した1期生の塚田貴大さんは、農業体験から食品の流通に関心をもち、4月に栃木県内の食品の卸売会社で働き始めた。「『とりあえずいろいろなことをしてみよう』の精神でいると、何でもできるのが学科の魅力」と語る。今はこの学科で学ぶメリットを明確に語ることができ、入学当初は自分の将来像をイメージすることができなかったという。地元茨城県内の公立高校時代は理系を選び、勉強することに特別喜びも不満もなく過ごした。自分は何がしたいのかわからず、志望校に悩んでいた高校3年の春、宇都宮大学に幅広い分野を扱う新学部ができること知り、決めた。

入学すると、同級生の中には既に地域おこしで地元貢献したいなど明確な問題意識を抱いて目を輝かせる人もいた。まちづくりの学科とあって、農業体験から夏祭りのボランティアなど県内外のイベントの情報があふき集まった。その一つに塚田さんの学生生活とこれからのつながる出会いがあった。

面白いって、知らなかった

た。茂木町の棚田での農業体験である。「週末の都心からの参加者や農家の人といわゆる農作業をしている時間が、他では経験したことのないほど心地よかった」と振り返る。

棚田に通ううちに、まちづくりへの考え方が変わった。地域の大きさは大小さまざま。広い地域の多くの人に貢献するまちづくりがあれば、小さな棚田に集まる人とその空間もまた地域。「その空間を楽しみ、大切にすることもまちづくりではないか」。塚田さんはそう考えるようになった。

社会人1年目、塚田さんには目標がある。多くの商品を扱う卸売りの強みを生かして、メーカーと新商品を開発すること。小さなメーカーであっても優れた商品は自分たちの工夫で全国に届けること。それから、社会人生活に慣れたら、再び茂木の棚田を訪れて交流を楽しみ、大切にすること。

目標の見つけ方も分らず入学してから4年。幅広く学んだ今、特に政治学の授業で学んだことをニュースで見かけたり、間の取り方で会話をより快適にできたりする経験を重ね、知ることに楽しさを実感した。「幅広く学ぶことは中途半端なのでなく、すべてを自分の興味や楽しみの入り口にしておくこと。学生生活での成果はとにかくどんな人とも話せる自信がついて、そして話したいと思えるようになったこと」という。

広がる「地域系」学部

「まちづくりに関する」や「地域創生」という言葉を聞く機会は増えた。今のまちづくりは単に開発や観光地化ではない。減っていく人口や高齢化、高度情報化、物流の変化によって変化する自分の生活圏をどう時代とニーズに適合させていくか試行錯誤し、暮らして直結するものを生み出すことが求められている。

に据えた学部の設置が相次いでいる。私立大学も含め、社会学の一端として、または総合政策学といった体系でまちづくりを扱う大学も増えた。

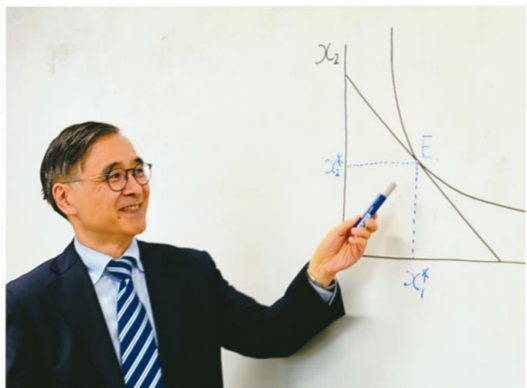
大学の教育にもその兆しは表れ、国立大学ではこの5年間で、宇都宮大学の他に、東京都立大学（4月に首都大学東京から改名）、高知大学、横浜国立大学などに「地域」を学問の主軸

に据えた学部の設置が相次いでいる。私立大学も含め、社会学の一端として、または総合政策学といった体系でまちづくりを扱う大学も増えた。宇都宮大学地域デザイン科学部の設立から参加し、この3月まで同学部長を務めた塚本純教授は「地域デザイン科学部の前例となるような学部や学科は少ない。またまちづくり自体も社会的な情勢や地域ごとの特性によって画一的な対応はできない」と語る。「成功」はあっても「正解」はないまちづくりと、その教育に向き合った4年を振り返った。

幅広い知識をもつ楽しさに出合った、と4年間を振り返る塚田さん



多くの人と出合い、話し、自分の中にある固定概念を打ち砕いていくことで、興味が多かった分野を知り、知ると面白くなる。「知る」「面白がる」を繰り返した4年間、原石だったまちづくりのセンスは輝きをのぞかせて、塚田さんら第一期生たちは力強く羽ばたいていった。



「大学で学んだことを10年、20年磨いて地域で活躍してほしい」と語る塚本教授

文系のコミュニケーションデザイン学科と理系の建築都市デザイン学科、社会基盤デザイン学科の学生が一緒に学ぶ「3学科融合」は新たな試みであり、期待と戸惑いの繰り返しだったという。

塚本教授が特に感じたのは、コミュニケーションデザイン学科と理系2学科の学生同士のコミュニケーションだった。ディスカッション、プレゼンテーションなどを一緒に行う上で浮き彫りになる、重視する点やそれぞれの専門の違い

10年後のキーパーソンを

から生まれる知識の差。時には学生から3学科合同での取り組みを行うこと自体への不安や、ためらいの声がかかれた。

新設の学部であり、「教育プログラムは教員も、学生の声を聞き改善に努めている」という。4年がたち、この4月に5期生が入学したが、3学科融合の模索は今でも続く。

あまりに幅広い分野を学ぶために、しばしばコミュニケーションデザイン学科の学生は自

分の専門分野がわからず不安がる。今春3年になった記者も時々そう感じることもある。特に1、2年生では顕著だ。そんな学生への「すぐ役立つものは、すぐに役立つなくなる」という言葉が印象的だ。まちづくりに体系的な教科書はなく、何が正解かわからない。それでも現状を見つめ、考え続ける力こそが求められる、価値のある知性なのだ」と学生に伝え続けている。

コミュニケーションデザイン学科

の学生は幅広い知識と「コミュニケーション」能力を養い、各分野の専門家同士をつなぐ懸け橋的な役割が期待される。「その役割は卒業後すぐに果たさなくても、10年、20年と学んだスキルを磨き地域や組織で発揮してほしい。異分野の学生と苦しみながらも協働することで育ってほしい。まちづくりとはそのくらい長いものだ」と語る塚本教授の言葉には、学生を育てる上での厳しさと優しさが込められていた。

現場で学ぶ目玉科目

宇都宮大学地域デザイン科学部では、文理3学科の学生での混成の班による「地域プロジェクト演習」が3年生で必修になっている。これは、約1年間にわたって県内の市役所や企業、NPO法人などの「地域パートナー」と一緒に課題の解決に挑む実践的な「学修」である。

の興味や関心をもとに、3学科混成で5人程度の班を組む。空き家問題から環境問題、首都圏へ流出した人口のUターン政策まで多様な課題に、それぞれ専門が異なる学生が取り組む。現状の把握や改善点のほか、提供するイベントや空間、製品、あるいは制度作りまで一貫して学ぶ。

んだ社会調査法や統計学などの知識と技術を用いて、課題に取り組み。知識の活用だけでなく、調査や企画の立案・実施、効果の発表を通して、予算や情報の取り扱い、社会人のマナーなどを実践的に体得していく。

プロジェクト演習では、年度末に全チーム合同で成果発表会を開き、学生と教員、地

域パートナーによる投票で優秀な取り組みを表彰する。昨年度の最優秀賞は、小山市消防本部予防課を地域パートナーとし「幼年期における新たな防火教育プログラムの開発」をテーマに、絵本を制作



学生と小山市消防本部が協働で制作した絵本

した班が受賞した。同班では保護者にアンケートを実施。子どもが火に近づく機会として花火やバーベキューをあげた回答が多かったことや、子どもは動物が登場する絵本を好むことなどが分かった。

結果を踏まえ、火災の際に炎と煙が与える影響を「ほのおおぼけ」「けむりおぼけ」などに例えて説明するなど「火災を恐れ、防ぎ、正しい対処を身につける」ための工夫を凝らした。

編集部から

新型コロナウイルスの感染拡大で、大学も対応を迫られている。当初は5月の連休明けの開講を予定する大学が多かったが、連休明けも厳しいという見方が広がり、オンライン授業に切り替えるところが増えている。宇都宮大学も、メディア授業を行う。当初は静止画像と音声だけだが、動画授業も模索していくという。この変革が大学教育にどのような影響をもたらすか興味深い。

【編集部・内山 勢】